
血族のカケラ

のあ@更新停止中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血族のカケラ

【Nコード】

N3433M

【作者名】

のあ@更新停止中

【あらすじ】

生まれてはいけない双子???

悪魔と天使の絶滅危機???

行われる謎の実験???

双子の結末、悪魔の結末、天使の結末、実験の結末…。

すべてが明かされる！

序章（前書き）

あー、と…。

なんかぐちゃぐちゃになりそうな予感！？

……ま、まあ頑張ります

序章

” 悪魔 “ と ” 天使 “ …… 共に暮らす事は絶対にできない。

悪魔は天使を殺し…… 天使は悪魔を囚える……。

お互いは最大の敵である???

悪魔の子から悪魔…

天使の子から天使…

こうやって継承されていく。

だがある時代…… 悪魔と天使の子が生まれた……。

これが後に言うヒト……。そう人間なのだ……。

それから悪魔の血族…… 天使の血族は薄れていってしまい人間の子しか生まれなくなり、悪魔と天使は絶滅危機に陥った。

その事実を突きつけられた悪魔と天使……。

そして、もう一つの問題があった……。

悪魔や天使は双子を生んではいけないのだ。

しかし生まれるのは双子ばかり……。

そして天使は双子を認める事にした。すると…… 天使族は再び豊かな平和な日常を取り戻した。

…… が、悪魔は双子を認めても現状は変わらなかった。

そんなある日、悪魔はある実験を密事に行いはじめた……。

その実験の材料は…… 『人間』。

その悲しき実験の材料になろうとしている人間の双子の子供…。

これは、その双子の人生が描かれた一つの『書』である…。

<祝福>のカケラ

??? 5月23日、午前4時43分…。

まだ外は薄暗い午前4時。

そんな不気味な朝に僕は生まれた。

おぎゃあ、おぎゃあ????

ある一室に響く生まれたばかりの赤ん坊の声。

そして一分も経たないうちにもう一つの赤ん坊の声が響き渡る。

「…くそっ、また双子かよ!」

「どうしましょう…」

その赤ん坊の父、母と見られる二人は苛立っていた。
なぜなら、双子は産んでは駄目なのだ。

「…………殺すしか…ないか…」

そんな父の発言に母は顔色を変える。

「ちょっと待って下さい!…双子でも私の子供です!」

「だからと言って、このままじゃ養えない」

「…………っ!」

母はその場に泣き崩れる。

そんな母を父は黙って見つめていた。

コンコン?????

『失礼します』

「入れ」

父が許可を出すと、扉はゆっくり開きお婆さんが入って来た。産まれたばかりの子供を両手に抱えて。

「先に生まれたこちらの子が男の子。そして後に生まれたこちらが女の子。どちらも健全です」

普通ならいろんな人に喜ばれる、祝福される出来事。

なのに、父も母もお婆さんも…誰一人として笑っていなかった。

「この子は…人間なのですか？」

母は今にも泣き出しそうな顔で聞いた。

お婆さんは申し訳なさそうに頷く。

ショックで気を失った母を父はなんとか支える。

「やはり…私のような悪魔と天使の子は人間しか生まれられないのか…」

「ですが、ほんの微かに…男の子にも女の子にも悪魔反応、及び天使反応が見られます」

「なに！？本当か！！」

父は目を見開きながらお婆さんに詰め寄った。

「はい…。ですが、本当に僅かなので成長するにつれ消える可能性

も…」

「構わんツ！今、反応を示しているなら魔王様や神様に許可をとろう！」

「でも…天使と悪魔は結婚してはなりません」

「それは結婚する前になんとか許可をとった！」

「そうですか…。では、その報告…私の跡継ぎであるサキも同行させます」

そうお婆さんが言うと14・15歳くらいの少年が出て来た。

「私はサキ・ラニアと申します」

「サキか…分かった。私はキラン・クイだ」

「…と言う事は悪魔族…ですか」

「ああ。こっちは天使族なんだが、結婚したからな。ニクハ・クイ」

「…以後、お見知りおきを」

そう言いながらサキは一礼した。

「では、行くぞ。ライ！」

「…はい？」

お婆さんは急に名前を呼ばれて驚いていた。

「ニクハの面倒、頼むぞ」

「はい」

返事を確認すると、キランとサキは部屋をでた。

<祝福>のカケラ（後書き）

…^{キラシ}父と母とお婆さん（ライ）の名前でるの遅いね…。
まあ…いいか…w w

< 未来 > のカケラ

「おーい、カリナあ！」

「ちょっと待ってっばあ！」

「???あれから幾年…。」

双子を育てる事を許された。
ある条件と一緒に…。

「サキです」

『用は何だ?』

「顔を会わせて話したく存じます」

『そのまま話せ』

サキは諦めたような表情をつくるとキランをちらっと見た。
キランは仕方ない、と言うように頷いた。

「…双子が生まれました」

『…誰の子だ』

「キラン様とニク八様の」

『人間なのだな?』

「それが…。僅かですが反応を見せております」

『何だと!?!?』

魔王は驚いたように声を上げた。

サキは気にせず、話を進める。

「キラン様やニク八様はこの少しの可能性にかけて育てていきたい、

との事です」

『…よからう。ただし、人間になったら殺せ。親の手でな』

「……伝えておきます」

『サキの近くにいるのではないのか？』

「いません」

サキは再びちらつと見る。

キランは話ができる状態ではなかった。

【自分の手で子供を殺す】

その言葉に反応して、震えてしまっていた。

「では、失礼致します」

『ああ、ごくろうだった。サキ』

「…これしか出来ませんから」

サキは一言そう言うと、震えているキランを背負い消えた。
そして家に戻って来た。

「あ、どうでしたか？」

「……」

キランはまだショックで震えており、話せそうに無い事をサキが悟ると話した。

ニクハのためにも…キランのためにも…言葉を選びながら。

「育てる事は許されました」

サキが言うと、キラン以外は安心して胸を撫で下ろしていた。
でもサキはですが、と付けたす。

「もしこの先、反応がなくなれば…」解放者“ではなく、親が子供を殺せとの事でした”

「っ!!」

ニクハは口を押さえる。

涙目になりながらサキにしがみつく。

「……………」

「うう…う…」

サキはそんなニクハをただただ悲しそうに見ていた。
そして落ち着いたのかキランが口をひらく。

「…解放者に、頼めないのか…」

「今、悪魔族の国は人間を無理矢理悪魔にする実験が行われています。その実験の成功率は0に等しい。そしてその実験の失敗作の始末は我々解放者が担当しています」

「…だから何だ。仕事だろう…!？」

「…………解放者にも…その実験が及んでいるのです」

「!？」

「だから…人手不足なんですよ」

サキは申し訳なさそうに俯き、言った。

「??? 解放者…」

それは悪魔族にも天使族にも…人間にも属さない特別な存在。
どこにも属さないため、神様や魔王の伝令を勤めたり、実験の失敗作の葬り…。

そして双子のうち一人…つまり、無駄な命を排除する…。

解放者の一番多い仕事は…殺す事…。

そのため、解放者は私情を出してはならない。

迷う事なく、小さな命…哀れな命をこの世から消すため…。

<再会>のカケラ

「ねえ、お父さん！サキ兄ちゃんが来てるよ！」

「ん？…ああ、分かった」

キランは双子の妹…カリナの頭を撫でる。

カリナは嬉しそうにニコツと笑う。

双子の兄…カユウはニクハに甘えていた。

???5歳になった、生まれてはいけなかった双子。

この家族は国の人から嫌われている。

【なぜ自分の家はいけなかったのに、あそこの家は許されたのか…】
という理由がほとんど。

ガチャツ???

「失礼します」

ドアが開くと、そこには少し大人になったサキが立っている。

雰囲気が変わったサキに多少驚きながらも椅子に座らせるキラン。

「どーぞ」

カユウはニクハの煎れたコーヒーを差し出す。

机に背が届かないため、どこか危なっかしい。

「ありがとう」

そんなカユウから笑顔でコーヒーを受け取り一口飲み、机に置いた。そしてサキがコーヒーから手を離すと…

ドンツ！????

カリナがサキの膝の上に飛び乗った。

サキはしばらく驚いていたが、すぐ笑顔でカリナの頭を撫でる。

カリナは撫でられるのが好きなのか、ニコおと笑う。

「悪いな。しつけが出来てなくて…」

「いえ、今はこういう年頃ですから。……しばらくの間これなくて申し訳ございませんでした」

「…気にするな。仕事…どうなんだ？」

「あまり、よくないですね。…最近は暗殺ばかりです」

「……人間のか？」

「いえ、それは失敗作になった時で。……近頃、実験の事を他国に洩れつつあります…」

「実験を知った人物、または見に来ている人物の排除か」

「…その通りです」

そしてキランは深く溜め息をついた。

そんなキランにカユウは近付く。

「ねえ、サキ兄ちゃん！あんさつつて何？」

なんにでも興味を示すカリナは”あんさつ“の意味を求めた。

そんなカリナにサキはただ微笑むだけ。

そしてカリナの頭を撫でながらの一言…。

「…カリナには、まだ早いかな」

「ふーん…そっか」

意外にもカリナはあっさり諦めた。

「…では、いきましようか。…検査をしに」

サキが咳くように言うと、キランもニクハも悲しそうな顔をして頷いた。

<血液>のカケラ

「では、始めますよ?」

サキはニクハとキランに確かめる。

…反応を調べるにはいくつかの検査をしなければならぬ。

ニクハとキランは不安そうに頷く。

そんな二人を励ますようにサキは笑いかけ、カユウとカリナに視線を向ける。

「なにをするの?」

「…注射?」

双子にとって理解させて検査するのは初めての検査。

検査をするのは五年おき。

0歳の時に検査をしたが、その時は双子は認識していない。

そしてあれから五年が経ち、双子はある程度分かる年齢になった。

「…そんな顔しないで。大丈夫、痛くないよ」

「…うん!!!」

そんな二人にサキはニコツと笑い、準備を始める。

最初の検査は血液検査。

道具をだした途端、双子の表情は恐怖一色になる。

「注射じゃん…っ」

「いやだあ!痛いもん!」

「いい子にできたらお土産あげるよ」

サキがそう言うと、双子はぱあっと笑顔になった。

「じゃあ、やるっか。どっちからがいいかな？」

「まず僕から！」

カユウは目を輝かせて言った。

そんな双子の変わりようにサキは戸惑いつつ、カユウの血液をとっていく。

そして終わってカユウをみると、怖かったのが固まっていた。

「終わったよー。おーい」

サキはそんなカユウの目の前で手をふる。

そして気付いたのか理解できていないような目でサキをみる。

「……………」

「？」

目を合わせて、サキが笑いかけても反応がないためサキは目で『？』をおくる。

するとカユウは急に椅子からたち上がり、ニクハへ無言で抱きつく。

「……………上手にできた？」

ボソッとカユウは呟いた。

そんなカユウにニクハは頭をなで、できたよ、と言う。

…とカユウはニコオと笑った。

「次はカリナのばんー」

ふてくされた顔のカリナがサキのひざにのる。

「それじゃ、できないよ。ほら、前に座って」

「……ぶう」

文句を言いながらもカリナは前に座る。

そして血をとられたあと、カユウと同じように無言でサキの膝にのった。

<視力>のカケラ

続いている検査は……。

「次は視力ね」

サキは双子にニコツと笑いかける。

双子の立つ位置には、黄色い線が引いてある。

「やり方は簡単。どこまで見えるか、っただけ」

サキは言うと同時に指を一本、双子の目の前で立てる。

「これ何本だ」

「一本!!」

「正解。コレを私は離れながらやっていくから、何本指を立ててるか当ててね？」

「うん！」

何でも楽しい事になってしまふカリナは元気に返事する。
カユウは心配そうにサキを見つめるだけ。

「じゃあ、始めるね」

そう言うのと、サキは双子から少し離れる。
そして指を立てる。

「4!!」

そして更に離れて指を立てる。

「「2！」」

するとサキは何か考え込むような動作をした後、定期的に下がって
いた距離を一気に広めて

双子からかなりの距離をあける。

「……………」

さつきと別人のようにサキは指を立て真剣な表情で双子の様子を見
る。

「2！」 「4！」

「……………」

サキは一瞬悲しそうな顔をして、目を伏せた。

そのサキをキランは真剣に見ていた。

でもサキは何事もなかったかのようにいつもの笑顔に戻り双子に近
づく。

「これでこの検査はおしまい。次は耳ね」

「（…感情を殺す事…、か…。これだから”解放者“は少しやっか
いなんだ）」

そんなサキにキランは苛立ちを覚えながらも見ていた。

<聴力>のカケラ

「ちょっと後ろ向いて」

双子は言われた通りに後ろを向く。

でもカリナは気になるのか、チラチラとこちらの様子を見る。

そんなカリナにサキはこら、と怒る。

しばらく経った後、サキは双子の肩をぽんと叩いた。

双子は振り返り、サキをじーっと見た後、サキの後ろにある中が何も見えない黒い箱を疑視している。

「この後また後ろを向いてもらうね」

そして、黒い箱の中に入ってるのを音で聞き取り、当てる。

…と言うルールらしい。

???ゲーム感覚だな…子供も喜びそうな…

キランは心でそう呟く。

そしてそっと微笑んだ。…でもその笑顔はすぐに消え、また同じように、

???サキ…お前の本当の目的はなんだ…。

???お前が解放者じゃなければよかつたのに…。

と、呟いた。

そんなキランの視線に気付いたのか、あるいは最初から気付いていたのかサキはキランを見る。

そんなサキと目が合った瞬間にキランは無意識に目を逸らしていた。

解放者は人を殺すため、何時でも冷静に回りを見る事ができる。
特にサキは19歳。解放者の中で最年少なのだ。

きつとそんなサキをキランは恐ろしかったのだ。

サキには何もかも身抜けられてしまうのではないか、と???

そして目を逸らされたサキもキランをずっと見つめていた。

何かを探るような眼差しで…。

「ねえ、始めないの？」

「やろうよ、サキ兄ちゃん！」

サキはそんな双子の言葉にキランを見るのをやめ、双子に笑顔を向ける。

始めようか、と言い双子に後ろを向かせる。

そしてまず一つめの音を鳴らす。

双子は同じタイミングで答える。

そして正解だったのか、次の音を鳴らす。

そしてその答えは…。

「ゴム！」 「ねじ！」

別の答え。

そして、視力の時は二人別の答えを言うと悲しそうな表情だったはずなのに、

一瞬だが、怪しい…冷徹な笑みを浮かべていた。

そんなサキに不信感をキランは抱きはじめた。

???…子供達に変な事したら、お前でも承知しないぞ…。

そう思った矢先、サキはキランを見る。
何もかも見透かしてしまいそんなサキの透き通った青の瞳に息をのむ。

でも、サキはすぐ笑顔になり言った。

「では、検査の結果をまとめて来ますね」

「あ、ああ……」

そう言うと、サキは双子に別れを告げると消えていった。

いつもと変わらない笑顔…

いつもと変わらない口調…

いつもと変わらない会話…

いつもと違うのは…キランがサキに抱く考えだった????

<聴力>のカケラ(後書き)

…サキは男の子です^^

(分かっていると思っけど…)

前話の時『私』って言うてるから誤解してないかなー、とww

<疑惑>のカケラ

あれから双子とキランは家に戻って、サキは一人解放者の本部へ戻り結果を出していた。

双子はニクハの作った夕飯を食べていた。

「ねえ、パパ食べないのお？」

「あら、ほんと。どうしたんですか？具合でも悪い？」

カリナはパンをかじりながら聞く。

ニクハも同じように心配そうに覗き込む。

そんな二人にキランはムリに笑顔をつくり大丈夫だ、と答えた。

「……………」

ニクハは何となく分かっていた。

だからかそれ以上は何も言わなかった。

きつとニクハも不安だから。

そして双子は食べ終わると、庭へ遊びに行った。

この時を待っていた、というようにキランが口を開く。

「…サキの事、どう思う？」

「いい子だと思いますよ？子供達の世話もやってくれますし…」

「……………そうか」

「…どうかしたんですか？」

「いや、なんでもない」

「…まさか」

と、ニクハが言いかけたその時…。

「…あの」

サキが現れた。

たくさん資料を持って…。

キランは、

今の話が聞かれたのではないか???

と心配し、サキを疑視していると…。

「……」

キランに笑みを見せた。

いつもの笑顔のはずなのに…全身に鳥肌がたつ。

背筋には冷や汗もつたう。

「…顔色が悪いようですが…。結果、でましたよ」

「……構わん。言え」

「その前に一つ」

「なんだ？」

キランは焦っていた。

今の話、つまりサキについて話していた時の話を聞かれていたのなら…と。

「さつき…私を”黒察者”（ぐさつしゃ）と疑っていませんかでしたか？」

「なんの事だ。そもそも黒察者とはなんだ」

「白々しいですね、」

サキは話をぼかそうとするキランを笑う。

今の悪魔族の大人で黒察者を知らない人はいない。

魔王から無理矢理聞かされている。

黒察者???

解放者と違い、意味なく人を殺す。

そして立場からすると悪魔側：というより実験の協力者。

そのため実験の材料になる人間を捕らえては実験に使う、といういわばスパイ的役目を果たす存在。

もちろんキランもニクハも黒察者の存在は知っている。

「…私はただの解放者ですよ。でも黒察者も近くまで来てますよ。魔王様が命令したのでは？」

「なにッ!？」

「近くといってもまだ、安心な所ですけどね。今のうちの住む場所を変えた方がいいでしょう」

サキは無理矢理黒察者の話を終わらせ、検査の結果を話す。

「結果、言いますよ？」

「……」

ニクハは念のため別部屋に移動した。

キランは大きく息を吐くと、サキの目を真っ直ぐ見て頷いた。

今はサキを信じるしか無い???

そう心に強く思いながら…。

＜動揺＞のカケラ（前書き）

更新遅くなってスイマセンm（
）m

< 動揺 > のカケラ

サキは真剣な顔でキランを見る。

キランはその目線を受け止めて頷く。

すると、サキは小さく息を吐くとゆっくり口を開いた。

「今はどちらも反応はありました」

「本当か！！！」

「はい」

キランはほっと安堵する。

でもそんなキランにサキはですが、と続けた。

「カリナの反応はほとんどありませんでした。本当に小さな反応で、明日消えていてもおかしくありません」

「…ッ！！！！」

キランは青ざめた顔でサキに聞いた。

「…もし明日反応がなくなったら…明日殺さないといけないのか？」

不安そうなキランにサキはニコツと笑いかけると、

「いいえ。検査で、なくなっていたららの話ですしね。それになくなっても分からないと思うので…。また五年後に検査をして反応がなければ…」

「……………」

サキはそこまで言うと、表情を曇らせる。
コンコン???

「？」

『あの…もう入っていいですか？』

「あ、ああ」

キランの返事を聞くとドアはゆっくり開き、ニクハが入ってきた。
キランはサキにどこか意味ありげな視線をおくる。

その視線に気付いたのかサキは何か考え込む動作をした後キラんに
向かって頷いた。

「…結果、どうだったんですか？」

「ああ、二人共大丈夫だったよ!!!」

キランはニクハに心配かけまいと、笑顔をつくりわざと明るい声で
報告した。

そんなキラんにニクハは安心したように、笑顔を向けた。

サキはそんな二人に一礼すると、仕事があるので、と消えた。

「……………」

「…どうかしたんですか？」

サキがいなくなった途端、怪訝そうな顔をしたキラんにニクハが聞
く。

キランは急に声を小さくして言った。

「…俺にはあいつが黒察者に思えて仕方ないんだが、」

「……………」

「お前はどうも思わないのか？」

「…はい。私は良い子だと思っんですけど…」

「まあ、あいつら（双子）をあまり子供だけにしないように用心し
とこじ」

「…はい」

ニクハは、おやつの間だ、と双子を呼びに行く。

キランは冷や汗をかいていた。

『白々しいですね』

『私を黒察者と疑っていませんか？』

キランはサキがこう言った時のあの冷徹な笑みを思い出していた。
だが、その笑みでキランは確信した。

…サキには裏がある、と?????

< 動揺 > のカケラ (後書き)

黒察者の読み方はぐさっしやですよー W W

<報告>のカケラ

次の日、慌てた様子でサキが家に来た。

双子が不思議そうにしながらもサキに寄っていった。

「どうしたのぉ？」

「…、あの…魔王様から急な伝達が…、」

「…？」

サキは言いにくそうにキランを見る。

キランは『魔王』という言葉に反応して顔を青ざめる。

…が、すぐにニクハに頼み双子を別部屋に移動させる。

「で、なんだ」

サキとキランしかいなくなった静かな部屋キランの太い声が響く。

「…言いにくいのですが、」

「…構わん、気にせず言え」

「では???？」

サキはゆっくりと詳しく話し始めた。

.....
.....

「失礼します…サキでござります」

『入れ』

魔王が一言言うと、扉が音をたてて開いた。その先には少し通路があり、階段がある。そしてその階段の上に魔王は座っていた。

サキはそれを見て息を呑むと階段の下まで通路を進み、片膝をついて頭をさげる。

「クイ家の双子の検査結果を伝えにきました」

「…ほう。で、どうだったのだ？」

「…双子の妹であるカリナ・クイ。この者の反応はもう明日消えてもおかしくない状態でした」

「そうか…。報告ごくろうだった。サキよ、」

「…はい？」

「キランに伝えてほしい」

「はい」

「…『カリナはもう駄目だろう。実験に使ってみてはどうか』と」

「っ……はい、承知致しました」

サキは【実験】に反応して少し汗をかく。

そんなサキと比べて魔王は愉快に笑うとサキに「行ってよい」と告げた。

言われた通りサキはゆっくりと立ち上がり魔王に悔しそうな表情を見せると、背を向け扉に向かって歩く。

そして扉から出た後、扉は再び音を立てて閉まった。

.....

「?????という事でした」

「なん、だと……っ」

キランは目を見開きながら驚いた。

「魔王様にはなんと伝えればよろしいですか？」

「……もう少しチャンスを下さい。」と

「……かしこまりました」

サキは一礼するとその場から消えた。

怪しい笑みを浮かべて????。

そう、先程の報告の話には続きがあった。

.....

扉の前でサキは何かを考え込むように俯いた。

「おい、サキ」

自分と呼ぶ声に顔をあげると、自分と同じくらいの女性が立っ

た。

この女の名前はミスナ・ヨカス。サキと同じ解放者。ミスナはにやあ、とした笑みを浮かべると言った。

「凄いねえ、さっきの演技。見とれちゃったあ」

「何が言いたい」

「別にいいけど、この後どうするのかなって」

「キラン様に報告しに行く。…前にする事がある」

「きやはっ！！やっぱりい〜？」

ミスナは楽しそうに笑い、サキに紙を差し出す。

「ここにいるよお。んじゃあね、詐欺師さん」

「……詐欺師じゃねえっつの」

サキは咳くように言うと言渡された紙を見る。

そして冷徹な笑みを浮かべてその場から消えたのだった。

<真逆>のカケラ

キランは双子のカリナとカユウを呼び出した。

二人共、始めは遊んでもらえる、と思つてついでにきていたのか無邪気な笑顔を浮かべていた。

だが、キランの真剣な表情に二人の顔から笑みは消え、少し怯えた表情だった。

「…お前ら、サキ兄ちゃんが好きか？」

突然のキランからの問いに二人ぽかん、としていたがやがて「当然」とでも言うように、

満面の笑みを浮かべ頷いた。

そんな二人の反応に少し悲しそうにするキラン。

「なんでそんな事聞くの？」

「お父さんは嫌いなのか？」

そんなキランに二人は不安そうに質問していく。

キランはサキが嫌い…というわけじゃない。

どちらかと言えば信頼できる…頼りになる解放者だ…。

サキは解放者になる人専門の学校でもかなり優秀な方だったらしいし判断力、瞬発力、理解力。

解放者に必要なこの三つの能力が長けている。

だが、「優秀だから」とか「能力が長けている」や「信頼できる」からと言って、完璧に心を許せるか、と言うとそうではない。

???優秀だから、怪しいんだ

???能力が長けているから、恐ろしいんだ

???信頼できるから、疑ってしまうんだ

実際、キランはサキのことを黒察者と疑っている。

あれだけ、優秀なら人を騙すこと…ましてや敵味方関係なく相手との関係の持ち方を知っているはず。

簡単に言つとサキは八方美人なのではないか、と言つ事だ。

「……お父さん？」

「??????」

カリナは何も言わず、ただ険しい表情で考え事をしているキランを心配に思ったのか、

不安そうな顔でキランの顔を覗き込む。

そんなカリナでふと我に返るキランだったが、カリナのことを見るとうしても…嫌でも思い出してしまふ言葉????。

『カリナはもう駄目だろう。実験に使つてみてはどうか』

キランは大きく、その言葉を否定するように首をふった。

そして心配そうに自分を見つめているカリナを安心させるように優しく頭を撫でる。

この時のキラン…父親の行動で、双子は理解するものがあつた。
まだたつた五歳でも…理解できた事…。
???サキ兄ちゃんがお父さんに何かしたのか、
というサキへの疑いがある事を…自分たちは理解した。

<訪問>のカケラ

コンコン?????

玄関に響くその音にニクハはまたサキが遊びにでも来たのか、と思いつつ出る。

「はい」

「こんにちはあ」

「は、はあ……」

「サキが来てないかなあって思ってえ」

妙に語尾をのびし吸い込まれそうな黒髪が肩まであるサキと同じくらしい少女への反応にニクハは困らされていた。そんなニクハはおかまいなしにその少女は話を進める。

「サキは来てないのお?」

「来てませんけど……」

「…ふうん……。」「

「何か用だったんですか?」

「用がなかったら会いにこないでしょお」

「…そう、ですね。名前、聞いてもいいですか?」

「…ミスナ。ニクハってさ、もう少し人を疑ったほうがいいんじゃない?」

「え?」

「じゃあねっ」

言うつミスナは姿を消す。

ニクハは少し動揺していた。『疑った方がいい』とかそういうことを言われたからじゃない。名乗ってもいないのに自分の名前を呼んだミスナに少し疑問を持ち始めた。

「…なんで…、知って…」

ニクハは誰もいない玄関でそう呟いた。嫌な胸のざわめきと少し恐怖心を抱きながら???

「どうかしたのか？」

「!?!?」

ニクハはふと聞こえた声に身を震わせた。が、声の主がキランだと理解すると先程の不安を打ち明けた。キランの両腕には気持ち良さそうに眠る、カリナとカユウの姿がある。

「サキに用事があるならサキの家を訪ねればいいじゃないか…」

全てを聞き終わったあと、キランは静かに呟いた。

????と、そこに…。

「お話の途中そうですがいいですか？」

「!?!?」

<笑顔>のカケラ

「どうかしました？」

「話、聞いたのか…？」

「いいえ、先程来たばかりなので…」

サキは真つ青な顔で問うキランとは正反対の笑顔で答える。

「…さつき、ミスナっていう子が来たんだけど、」

「!?!？」

ミスナ、という名前を出すと笑顔は一気に消えて真剣な表情でニクハを見つめた。

「なにか、言っていましたか？」

「もう少し人を疑ったほうがいい、と」

「…あいつ、」

サキは誰にも聞こえないほどの声でそう呟く。

そしてサキはにこつと笑みを浮かべると用がある、と言ってその場を消えた。

*

*

*

「おい、」

サキは見知った背中を見ると少し怒ったような声で話しかける。相手はゆっくりと振り返ると冷徹な笑みを浮かべる。

「どうしたのさ、」

「ニク八様に誤解をうむようなことを吹き込むな」

「…なんのこと？」

「ミスナ、」

サキは静かな口調でその子の名前を呼ぶ。するとミスナの表情は一気に怯えへと変わった。

「分かったよ！！話すから怒らないでっ」

サキにとっては別に怒っているわけではないのだが、ミスナにとっては静かに名前を呼ばれると怒っていると勘違いをするらしく、案外この手は効くためサキ自身もよく使っている。

「だってえ…、サキのこと色々疑ってるからあ…」

「そりゃ疑いもするだろうな」

「…え？」

「俺が解放者なんだから…」

サキは自分が疑われてる理由が“解放者だから”という事に確信があるらしい。

そしてサキは大きいため息をつくと言った。

「あの”作戦“は今夜あたりに決行だな…。お前がいらぬ事を言わなければもう少し時間を稼げたんだがな」

「だから、ごめんってえ」

「あゝあ…準備しとけよ？時間になったらここに来い」
「わ、分かった」

それだけ言うと、サキは姿を消す。

誰もいなくなった丘にミスナはポツリと呟いた。

「…解放者、」

<言葉>のカケラ

「…カリナ、いいか？よく聞くんだ。あと、カユウも」

キランは自分の部屋にカリナとカユウを呼ぶとゆっくりと低い声で言った。

その声音で二人は真剣な話だ、ということを感じたのか頷く。

「…サキにはもうあまり近付かないでほしい」

「何で？」

キランの言葉にいち早く反応し口を開いた。

「…カリナはサキの事好きだもんな」

「僕もだよっ！」

「ああ、カユウもか」

「…お父さんは好きじゃないの？嫌いななの？」

カリナの言葉にキランは少し目を伏せる。

「…嫌いなわけではない。でも、好きにもなれない…、信用し難い人物。」

ただ信用できないというだけで嫌い、と言っていいのか。

「…嫌いじゃ…ないかな」

「…じゃあ何で？」

「…悪い。ちょっとお母さんと話して来るから二人で遊んでおきな

さい」

キランは話を逸らすように…そして二人から逃げるように自分の部屋を出る。

そんなキランが気になったのかカリナとカユウはバレないように付いて行き、キランの入ったドアに耳を当てる。

『…どうしたんですか？』

『さつき…あいつらにサキに近付かないでほしい、って言ってきた』
『なんで…！』

『でも子供つてのはやりにくいな。根掘り葉掘り聞いてくる』

『純粹なんですよ。…あの子達にとってサキはお兄さんのような存在なんですよ。家族と同じくらい大好きなんです』

『だが…』

「……………」

まだ幼い双子には言っていることが理解できてないような表情をしていた。

カリナはカユウの手を引っ張ると庭へと走る。

「ねえ、あれどどういう意味かな…」

「…僕が知るわけないじゃない」

「サキ兄ちゃんに關係してるみたいだったでしょ？サキ兄ちゃんに聞いてみようよ」

「うん」

カリナは少し興奮したようにカユウへ話す。

そんなカリナに気圧されたのかカユウはぎこちなく頷いた。

頷くことを確認するとカリナはそそくさと進み始めた。

<行動>のカケラ

「あ、いた！」

カリナはサキを見つけると指をさす。

サキはこのことは想定外だったのか、目を見開いており、動揺を隠せていないようだった。

「なんで……」

サキは2人を見ると一瞬悲しげな表情を浮かべるも、幼いカリナとカユウは気付かずサキに歩み寄る。

「お父さんがね、サキ兄ちゃんには近付くなって言ってきたの！何かしたの？」

「……動いたんだ」

ぼそつと呟く。

すると黙っていたカユウが、さっきの言葉の意味を確かめようと口を開く。

「どういう意味？」

「……なんでもないよ。そうだ、ここじゃなんだから、僕の家においてよ」

「お菓子！？」

「うん」

一気に明るくなったカリナにサキはにこつと笑う。カユウはサキを

疑視しながらも頷く。

そしてサキの家へ向かおうとした瞬間、

「おい！カリナを何処へ連れて行く気だ！」

「…あらら」

サキは見つかった、と言わんばかりに笑みを浮かべた。

始まった、という思いと…つながった、という自信に満ちた笑顔が

…満月の光で不気味に照らし出された。

< 猛獣 > のカケラ

「遅かったですね」

サキはキランへと笑いかける。

キランはそんなサキに一瞬不気味さを覚えるも、サキの近くにいるカリナとカユウに目を移す。

「こっちに来い！カリナ、カユウ！そいつから離れる！」

2人はよく分からなさそうにしていたが父親の言葉に反応し、駆け寄ろうとした。

が、その瞬間、

ガッ???

「…駄目だ」

「…え？」

サキは2人の腕を掴むと自分側に引き寄せた。

そんなサキの行動にキランは段々と慌て始める。

「では、この2人のどちらか一人返してあげましょう。と言われた場合、貴方はどちらを選びますか？」

「…何が、言いたい」

「そのままです。仕掛けもこの質問への意図も何もありません」

「信じられるか…！」

「答えて下さい、キラン様。どちらですか？」

サキの目は真剣そのもので、仕掛けもなく意図もない、の言葉に嘘はないようだった。

「……………もちろん、ふた」

「二人共、なんて答えは無しですよ」

「っ……………」

「それじゃあ答えになってないでしょう」

「……………」

「さあ。カユウか…カリナか」

キランはその質問をなげかてくるサキの表情に息を呑んだ。

満月の光に照らされて、まるで別人のような恐ろしい表情をしているのだ。

一言で表すなら…蛇、という言葉が合うだろう。

他にも、獲物を仕留める直前の猛獣…か。

どれにしても、キランは恐怖心を消せないでいた。

<真偽>のカケラ

「…ここではっきりしたらどうですか」
「何をだ」

サキはいつまでたってもはっきりしないキラんに戸惑い、そして困っていた。

確かに二人共大切な子供だろう。
でも家族、という関係以外にも関係があるはずなのに…。

「はっきりするのは、お前の方なんじゃないのか？」

「…？と、言いますと？」

「黒察者だ、と早く言えばいいんだ」

「…何の話です？」

キランは相手の一番言われてはいけなさそうな事を口にする。
したはずだった。

でも、サキはさきほど同じく表情を一切変えることなく聞き返して
くる。

「…キラン様。貴方は大きな勘違いをしていらっしやるようで」

そんなキラんにサキは可笑しそうに笑った。

カユウとカリナは話の意味さえ理解できぬまま、サキの腕の中で
よんとしている。

「…ねえ、いつまで続けるの？」

「っ!？」

キランは後ろからの声に身を震わせる。

勢いよく後ろを振り返るもそこには誰もいない。

「いーじゃない。子供には黒察者なんて分からないでしょ」

次はさきほどまでサキがいた場所から声が聞こえる。

振り返ると、サキの隣に…女の人が立っていた。…ミスナだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3433m/>

血族のカケラ

2011年10月7日06時46分発行